

## 福祉教育への挑戦(8)

### 「この授業が一番好き」という言葉に救われて

高井裕二

新型コロナウイルスの感染拡大が問題となって、かなりの年数が経ちました。所属先の大学でもリモート授業や学生同士の接触を極力制限した演習など、体験的な学習機会を提供できないままソーシャルワークの現場実習に送り出すようなこともありました。「なるべく向かい合わせにならずにグループ討議や演習をする」という非常に難しいお題にも向き合ってきました(遠隔授業で演習をするような機会は本当に難しかったです)。

非常勤先の高等専修学校で考えてみますと、今年の3年生は入学してからずっとマスクをしてクラスメイトと接し、学校行事についても中止を含めて様々な制限を受けて過ごしてきました。本来であれば経験できたであろうことができないまま、卒業させてしまうことに申し訳なさを感じるとともに、残された期間で体験できることはないかと頭を抱える日々です。この文章を書いているのは11月末で、2学期も後半に差し掛かっています。中には、進学や就職先なども決まり、卒業後の生活を考え始めている生徒も出てきています。

私は昨年から引き続き「生活支援技術」という科目を担当し、ケアに求められるアセスメント力に加えて、具体的な支援技術についても伝えることが求められます。去年は移動・移乗などを教えるために車椅子や歩行器を使用した内容を扱いましたが、生徒同士で演習する時間は短く、デモンストレーションとして教員と生徒の1対1での対応を見てもらい、支援に必要となるポイントなどを文章にしてもらうようにしました。今年は単元的に睡眠や終末期ケアといった内容でしたので、プロジェクターを使ってパワーポイントのスライドを移したり、終末期を迎えた高齢者のドキュメンタリー動画などを視聴してもらったりしながら、教科書の内容を深めるような組み立てにしています。

前にも書きましたが、今年は3コマ連続で授業を持たせてもらっているため、1時間目の授業の導入には時間を割くことができ、前回授業の振り返りシートに書かれた感想や質問へのフィードバックなどを行っています。フィードバックを続けていくことで、自分の感想や質問を取り上げてもらいたいという意欲を刺激することができているのか、沢山書いてくれるようになってきました。その中で、嬉しかった内容があります。それは「この授業は、介護だけでなく福祉を学んでるって感じで面白い」、「先生が生徒の質問を見て、分からないことは授業までに調べてきてくれるので、嬉しい。この授業が一番好き」というものです。もちろん教材研究をしながら、教科書の内容にも準拠して教えていますが、「生活支援技術はこれで、良いのか」という不安を常に抱えていたので、この感想をもらった際に「体験的な学びを十分にできている自信がなかった」と正直に伝えました。すると、ある生徒から「そういうのは、入職してから研修でも学べるって聞いているで。先生から聞く利用者を観察する際のポイントや関わり方とかエピソードは先生からしか聞かれへんと思うから、この授業楽しい」との言葉をもらいました。自分の「生活支援技術」の教授力はまだまだ課題があるものの、生徒たちに伝わっているものがあると実感できたことで、このまま非常勤にて様々な授業展開に挑戦し続けようと思えました。

ちなみに、「また新型コロナウイルスの感染者増えてきたね」と授業開始時に話すと「いや先生、かかる時はかかるから。考え過ぎたら負けやで。楽にいこう」と励まされました。この時代を生きている若者、頼もしいです。